

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院学生研究
2024年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	日本文学専攻
研究代表者 (2025年3月現在のものを記入)	在籍課程・学年		氏名
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 1年		田中美咲子
指導教員	所属部局・職名		氏名
	文学部・教授		金子明雄
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題	戦後占領期の文学者による戦争「美化」表現の歴史的検討		
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2025年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	立教大学大学院・文学研究科・日本文学専攻・博士後期課程・1年（研究代表者）		田中美咲子
研究期間	2024 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

当該研究の研究目的を含むこと。

本研究は、戦争の美しさや魅力について語る表現の問題を問うてきたこれまでの視点から、そもそも戦争のどのような側面に美しさや魅力が見出されたのかという問題設定へ立ち返り、特に、戦後占領期という、プロパガンダ的に戦争を煽る必要性も低下し、かつ戦争を経験してその苦痛を知っている時制においてなお、どのような魅力が再生産されたのかという問いを解決しようとするものである。

この問題の解決のために、本研究では、つぎの二つの方法を併用した。すなわち、①これまでに戦後に戦中を美しいと語った“異常な”例として挙げられてきた代表的な言説について、再読・精読を行うことでそれがどのような言説であり、どのような意味を持っていたのかを明らかにする。②占領期に文学において中心的な位置を占めていた作家について、その文学作品に限らず、発表された言説を収集し、整理することによって、そのなかでの戦争言及の様態を明らかにする。これに占領期の戦争の魅力的な側面に言及する言説を位置づけなおすことで、本研究の問題解決に繋げる。

これにより、普遍の問題として語られてきた戦争に対するアンビバレントな価値観と文学の接触を明らかにすることを目的とする。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[占領期] [戦争表象] [美化]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
- ・何をもちて研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。

戦争という避けるべき事象について、しかし、古くから認められてきた一側面として、戦争の魅力がある(※1)。アジア太平洋戦争が大きな記憶である日本文学にとってこれは、とくに戦時プロパガンダとして連想され、また研究が深められてきた(※2)が、戦時・平時に関わらず、また世界的に戦争に対する批判意識と魅惑される感情は並存してきた。

このなかで、戦争に国民を送る体制である場合の魅力の表出と、平時にフィクショナルな想像力として提示されるそれと、性質をやや異にしているものとして弁別されてきたのが、戦後すぐに文芸作家によって発表された一部の戦争表象である。戦後すぐに戦争の魅力を語ることはすなわち、どのような形であれ、確実に戦争経験者が書き手であること、なおかつ、敗戦の記憶、また空気がまだ濃厚な時期に世に送り出された言説であったことを意味するからだ。このある種の〈場違いさ〉が注目され、先行研究ではB-29 イメージにおける戦争の美の表象(※3)や、坂口安吾・太宰治らの言説における戦争表象を対象とした個別研究(※4)が主に行われてきた。しかし、戦後に戦争の魅力を表現した言説がどの程度特殊であり、また、どのような状態で、どのようにその言説空間を形成していたのかを明らかにするためには、より包括的な資料分析が必要となる。

そこで、本研究では“戦後すぐ”の時期を、言説の発表者が確実に戦争経験者(あるいは体験者)であり戦争の気配がまだ色濃いと想定できる占領期に措定した上で、①これまでに戦後に戦中を美しいと語った“異常な”例として挙げられてきた代表的な言説について、再読・精読を行うことでそれがどのような言説であり、どのような意味を持っていたのかを明らかにする。②占領期に文学において中心的な位置を占めていた作家について、その文学作品に限らず、発表された言説を収集し、整理することによって、そのなかでの戦争言及の様態を明らかにする、という二点の方法を並行して行った。

なお、この時期を対象とした場合、GHQ 検閲により事実上の発禁となった資料、もしくは文章の変更が加えられたものが対象となることになるが、これまでこの分野で挙げられてきた作品が当該時期にも発表されていること、また本研究は実際にその時期の読者に供された言説であることを重視するものであることに鑑み、この範囲とした。

① 代表的言説の分析

戦後に戦争の魅力を「美しさ」という視点から描いた代表的な例の一つとして先行研究でも取り上げられてきた言説に、谷崎潤一郎の短篇小説「A夫人の手紙」(1950年、中央公論社)と随筆『疎開日記』(1946年10月の『人間』より順次多誌に発表、1949年9月の「終戦日記(熱海より勝山まで)」に至る全7本の作品を改題し『月と狂言師』(1950年3月)に所収)がある。これらでは前者で自国機、後者で敵機の視覚的美感を取り上げられており、これまでドナルド・キーン(『日本人の戦争』2009年、文藝春秋)、若林、蓮実重彦(「〈美〉について 谷崎潤一郎『疎開日記』から」小林康夫・船曳建夫編『知のモラル』1996年、三陽社)らがこれら作品のその部分をクローズアップして戦後の特徴的言説として取り上げ、また谷崎研究においても永栄啓伸(「爆撃機へのまなざし——(作家)谷崎潤一郎の変容——」『芸術至上主義文芸』1999年1月)が「純粋に美しいものを描こうと」する谷崎の姿として、また福岡大祐が検閲の問題を論じるその論文(「〈敵〉の布置——潤一郎敗戦期テキスト群を照射する「A夫人の手紙」——」『日本近代文学』2011年5月)のなかで「A夫人の手紙」において美の形容のなかから欠落した「敵」の存在を検閲との関係で論じている。しかし、発表の時系列と、西野厚志(「谷崎潤一郎『A夫人の手紙』素材・周辺資料紹介(翻刻・比較・注釈)」『京都精華大学紀要』2019年2月)によって明らかにされた「A夫人の手紙」におけるモデル資料の存在、その谷崎による改変の問題を踏まえた上で、両作を通じて発信された戦闘機の美しさ、ひいては『疎開日記』において至る戦争そのものの美しさへの接続が、両テキストにおいてどのような意味を形成しているのかという具体的分析には至っていなかった。

本研究では、まず「A夫人の手紙」について、テキストにおける主人公・泰子像の造形と、泰子の行う表現の位置づけが、もともとは森村春子という実在の女性を書いた手紙であったものに谷崎が改変を加えることによって意味を付け加えられ、その結果として本作における戦闘機の美しさの記述がその感性の残酷さを露呈させるというように機能していることを明らかにした。具体的にこれは、本テキストでは泰子の表現が「退屈ざまし」に行われるものであり、またその記述は日常の些末な出来事として配置されていること、加えて、泰子に厭戦思想が添加されることによって泰子の中に並存する戦争を鑑賞する立場からの楽観的な感性と、戦争を体験する立場からの悲観的な厭戦思想のアンビバレントさが作りだされ、それが、戦争を鑑賞する視線の残酷さを生々しく露呈させるものと

研究成果の概要 (つづき)

なっていると指摘し、併せてこれが、谷崎が同時期に繰り返し述べているこの作品の当初の発表予定時期であった1946年夏へのこだわり(「A夫人の手紙」発表時末尾注記のほか、「谷崎文学の底流(対談)」(伊藤整・谷崎潤一郎『中央公論』1958年1月号)におけるその時期でなければ面白くない旨の発言を指す)の意味を考える上で非常に示唆的なものとなることに言及した。以上の成果は、後述の研究成果の項目③に示す立教大学における口頭発表で発表した。これに継続して、随筆『疎開日記』における戦争体験者としての谷崎の眼差しが、戦争と美を直結させる表現として表出したことを取りあげ、その成果を後述の研究成果の項目①における『立教大学日本文学』投稿論文で発表した。

『疎開日記』は谷崎が戦中の日記に手を加えて発表したとしている随筆であり、ここでは、自宅から空を見上げる谷崎が、敵機の姿の美しさに見入り、かつ、その後の感想として「戦争」そのものを美しいとするに至る描写が存在する。本研究は本作の、発表当時複数の雑誌へ投稿された断片の集合体という性質に着目し、そのなかで戦争の美しさを述べた回の特異性を明らかにしたうえで、それが「A夫人の手紙」と似て異なる方法によって日常のなかに配置されることで、その感性が肯定される条件としての生の安全性を示していることを指摘した。谷崎の同時期のふたつの言説は、結果として、戦争の美しさを表現することで戦争のさなかにはないことの価値を導くという機能を果たしていると言えることを拙稿では結論付けている。ただし、このことは表裏として、戦争のさなかでなければ戦争は美しいと感じられてしまうことを明かしづけているともいえ、あらためて、戦争をなんらかの形で体験してなお戦争を美しい、あるいは何らかの魅力を持つものであると捉える表現の分析の価値の普遍性を言い当てている。研究史において取りあげられてきた他の作品、また、以下に示す同時代言説との関連のなかで、引き続き分析を続けていく。

② 言説収集と整理

占領期の言説を整理するにあたり、どの言説を取捨選択するかは難しい問題である。本研究では当初、戦争の魅力に言及する言説の収集を想定したが、戦争の魅力に言及しているとはどのようなことを指すのか、また、どの程度の範囲から探索を行うのかといった基準の客観的な指標自体が存在していない。言語調査の場合であれば、無作為なサンプリングを行うことも視野に入るが、今回のような場合、無作為に抽出した言語データに対象が含まれない恐れがある。また、これまで指摘されてきた文脈を踏まえ、戦地や特に戦闘機を扱う作品に対象を絞ることも望ましくない。したがって本研究では、ある程度の代表性を客観的に記述できる指標として、発表当時の文壇での言及の多寡を、またその補完的要素として各種ベストセラー調査の参照という方法を導入した。

前者についての指標としては、『文芸時評大系』(ゆまに書房)における言及頻度を用いた。同書は同時代の全ての時評をまとめたものではないが、時評文章内における作家名等の固有名の統計を取ることができる資料としての側面に注目した。占領期間に当たる時期の本資料における言及作家数は1773名であり、氏名の登場回数一回を言及回数として計測した調査の結果、言及回数分布は高頻度層と低頻度層の差が大きく、一部の人物に話題が独占されていることを示す、弁別能力の高い指標であることが分かった。本研究では得られた度数分布から、まず累計言及回数の20%を占めるラインを任意に設定し、各年の上位者と全期間上位者を割り出すことによって、計43名に絞り込み、その妥当性を精査することを並行させるかたちで目下資料収集を行っている。また、同書の性質によるデータの偏りを補完するため、各種ベストセラー調査を参照するものとする。

現在個人全集の整備されていない作家から資料の所在確認、および収集を進めている。並行して『読売新聞』と『朝日新聞』当該年間における語「美しい」(活用含む)のコロケーションデータを収集し、こちらは作業を完了している。この作業においては、解析手段としてKH coder(※5)を使用している。引き続きデータ収集を進めるとともに分析の段階に進み、成果を報告していきたい。

(※1) そのなかで戦後のエンターテインメントを概観しながら高原は次のように言う。「つまり、こういうことだ。私たちは戦争が大嫌いだ。だが同時に、私たちは戦争が好きでたまらない。私たちは戦争まみれになりながら戦争を罵っている。」(高原到『戦争論』2023、講談社)

(※2) 例として『「負け方の問題」(五味渕典嗣、2023、有志舎)。

(※3) 『B-29の昭和史』(若林宣、2023、筑摩書房)。

(※4) 例えば坂口安吾研究における例として『戦争と一人の作家』(佐々木中、2016、河出書房新社)。

(※5) 樋口耕一「テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合—」(『理論と方法』2005年、数理社会学会19(1)p101-115)。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください (紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

田中美咲子「「斯くも美しき」戦争と生——谷崎潤一郎「A夫人の手紙」「疎開日記」の共鳴」『立教大学日本文学』2025年3月30日

④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

田中美咲子「戦闘機表象から見た谷崎潤一郎の戦争表現——「A夫人の手紙」を中心に」2024年度立教大学日本文学会大会、立教大学、2024年7月6日